

逆ストループ干渉と精神疾患

渡辺, めぐみ

<https://hdl.handle.net/2324/1441004>

出版情報：九州大学, 2013, 博士 (心理学), 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開 (3)

論文審査の結果の要旨

本論文は、ストループ干渉・逆ストループ干渉の二つの干渉を測定できる検査を作成し、それらを指標として精神疾患の注意機能の特性を明らかにしようとしたものである。実験的研究により、次の二点が明らかにされた。第一に、統合失調症では、20歳代で逆ストループ干渉が、30歳代以上でストループ干渉が健常者より有意に大きくなること、逆ストループ干渉と衝動の制御には深い関連が認められることである。第二に、標準手順で検査を実施すると、うつ病では両干渉ともに健常者より有意に大きくなるが、不安障害ではストループ干渉だけが健常者より大きい傾向があること。さらに検査内の課題の切り替え数が標準の二倍になる手順で検査を実施すると、健常者は両干渉ともに標準手順よりも上昇するが、うつ病では両干渉ともに標準手順と変わらないこと。一方、不安障害では逆ストループ干渉のみが上昇することである。これらの結果から、逆ストループ干渉が精神疾患と健常者との差異、ならびに精神疾患間の違いを示すのに有効な指標であり、二つの干渉を測定できる本検査は、注意機能の臨床評価指標になり得ることが示された。よって、本論文は博士（心理学）の学位に値するものと認める。